

紀 要

第 24 号

—設立40周年記念号—

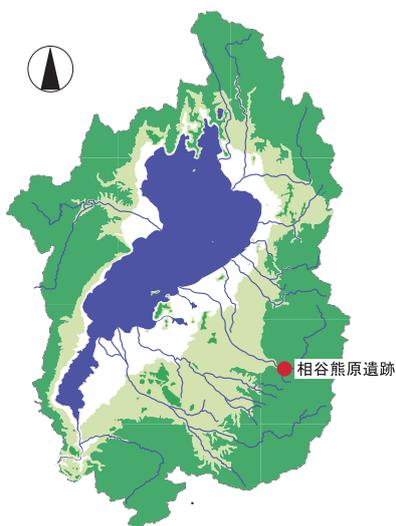
2011.3

財団法人 滋賀県文化財保護協会

縄文時代草創期の 遺構と遺物

— 東近江市相谷熊原遺跡 —

写真：滋賀県教育委員会提供



■土偶が出土した竪穴建物跡
相谷熊原遺跡は、愛知川上流の段丘上にひろがる縄文遺跡である。縄文時代晩期の墓地のほか、縄文時代草創期の住居（竪穴建物跡）が検出された。（重田論文参照）



■矢柄研磨器
今回検出された5棟の竪穴建物跡から溝をもつ砥石が出土した。その形状から矢を成形するさいに使用されたものと考えられているが、縄文時代草創期に限定される石器であり、その機能には謎が多い。（松室論文参照）



■出土した土偶
ふくよかな体に豊満な乳房を表現した土偶である。縄文時代草創期に位置づけられるもので、日本最古級の一例となった。高さ3.2 cmの小型品で、手足の表現がなく、上半身のみを表現する。（瀬口論文参照）

【小特集 東近江市相谷熊原遺跡をめぐって（2）】

鈴鹿山中の遺跡にみる選地の原理

—相谷熊原遺跡の理解に向けて—

重田 勉

1. はじめに

2009（平成21）年、東近江市永源寺相谷において、県営ほ場整備工事に伴い、相谷熊原遺跡の調査が行われた。調査の結果、縄文時代草創期の5棟の竪穴建物からなる集落跡や縄文時代晩期の土器棺墓群が出土した。近畿では縄文時代草創期の資料が少ないため、非常に重要な発見であった。出土した竪穴建物からは、全国的にも珍しい縄文時代草創期の土偶が出土し、当時の居住形態や精神文化を考える上で、全国的にも注目される遺跡となった。

相谷熊原遺跡は、検出遺構や出土遺物だけでなく、鈴鹿山地に所在することも注目すべきことであり、東西文化の交差点ともいべき近江の歴史を考える上でも重要な遺跡である。しかし、鈴鹿山地の遺跡の実態は不明な点が多い。遺物の出土のみが知られる遺跡が数箇所あるが、遺構の内容等が不明で、鈴鹿山地における人間の活動内容は不明といわざるを得ない。歴史を探る上で、平地に展開する遺跡にのみ着目されがちであるが、文化の発展は特定地点のみで完結するわけではなく、複合的に作用し、発展していくものとする。よって他方面との交流や外縁部での活動や開発に何らかの関係がある山中での活動痕跡は、決して無視できない。

本稿では少ないながらも鈴鹿山地の遺跡の立地条件などを整理し、山中の遺跡について考えたい。

2. 鈴鹿山地の地形と地質

（1）地形

鈴鹿山地は、南北約55km・東西約10kmに渡って連なる山地で、滋賀県と三重県の境界を成す。山頂部から平野部までの傾斜は特徴的で、滋賀県側は緩やかに湖東平野部まで傾斜するのに対し、三重県側は急峻な斜面となっている。

山地形成の成因は諸説あるが、山地両側の断層の活動と、褶曲と隆起などの造山運動が複合的に作用して出来たようである。鈴鹿山地は六甲変動と呼ばれる活発な造山運動によって成長してきた。六甲変動の最盛期は20～30万年前といわれる。

山地の主稜線は、藤原岳・御池岳・御在所岳などの1,000m超級の山々で形成され、山頂部は御所平や霊仙岳のような準平原となっている。

（2）地質

主として堆積岩が多いが、山地東部から南部にかけては花崗岩を中心とした火成岩帯がみられる。山地全体を通じ

てみると、北部は石灰岩、南部・東部は花崗岩、西部は粘板岩や砂岩などから成る。綿向山麓にみられる接触変成岩帯等もあり、単一の地質ではない。これら堆積岩と火成岩および変成岩を基盤とし、東方より移動してきた古琵琶湖層が重なる。このような複雑な地質のためか、量的には多くないものの、鉱物資源の採取も不可能ではない地である。

3. 鈴鹿山地の遺跡

鈴鹿山地では事例は少ないが、遺跡が存在する。

（1）鈴鹿山地の遺跡の内容と立地

相谷熊原遺跡（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2009・2010、松室・重田2010A・B・C）冒頭に記したように、縄文時代草創期の5棟の竪穴建物が見つかった。標高220m付近に立地する。東近江市永源寺相谷（旧神崎郡永源寺町相谷）に所在する。縄文時代草創期～晩期の遺物が出土し、ほぼ縄文時代全般にわたり、何らかのかたちで利用されてきた地であることが明らかとなった。**百済寺南川遺跡**（滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会2007）東近江市百済寺町（旧愛知郡愛東町北古屋）に所在する。2005（平成17）年、砂防工事に伴う発掘調査において、南川右岸の斜面地において弥生時代後期の集落跡が、標高360mの山中で出土した。発掘調査では計6棟の竪穴住居が出土した。いずれの竪穴住居も、調査前の地形観察では小規模な平坦地となっており、山中の斜面地では不自然な地形となっていた。このような不自然な小平坦地は、調査対象地周辺の山中に50箇所以上分布しており、全てとはいえないまでも、不自然な小平坦地には竪穴住居が埋没している可能性がある。

ゴマ畑遺跡（瀬川2000）蒲生郡日野町鎌掛に所在する。鎌掛集落の南東の丘陵上、標高約370m付近の耶斧岨川上流の谷奥部に立地する。1913（大正2）年に林道開設工事中に、ほぼ完形の古墳時代前期の土師器の甕が出土した。**山女原遺跡**（丸山1975）甲賀市土山町山女原に所在する。旧土山町山女原集落の東方約800m、標高440m付近の猪谷川上流部の左岸の谷斜面に立地する。林道開設工事に際し弥生時代終末期から古墳時代初頭頃の土器が出土した。土器の出土に伴い、小規模ながら調査が行われたが、遺構は確認されなかったらしい。遺跡の位置は、東海道の間道として使われていた安楽越えと呼ばれる山越えルートの中にある。出土した土器は、ほぼ完形の甕および甕の底部片・台付甕の底部片・器台である。早くより鈴鹿越えの間

道ではありながらも往来が多かったといわれる安楽越えのルート上に遺跡が立地していることもあり、これらの土器は東海系の影響または搬入品と思われるものもあるらしい。鈴鹿峠遺跡（甲賀市史編さん室編2007）甲賀市土山町山中に所在する。標高約350mの鈴鹿山地越えのメインルートでもあり、近畿と東海をつなぐ大動脈でもある峠に立地する。現況は茶畑であるが、古墳時代初頭頃の土器のほか中世の土器などが採集されている。

上記の五遺跡の内、遺構等が確認できたのは相谷熊原遺跡と百済寺南川遺跡である。多賀町の佐目でも縄文土器が出土するらしいが、詳細は不明である。

（2）鈴鹿山地の遺跡の位置と断層地形

滋賀県内では多くの活断層が確認されている。鈴鹿山地の西側には、山地形成の成因ともなった鈴鹿西縁断層帯が連なっている。この断層の平均活動間隔は約18,000年～36,000年とされている。図1は各遺跡の位置と、鈴鹿西縁断層帯の位置を示したものであるが、鈴鹿峠遺跡を除く四遺跡については、いずれも鈴鹿西縁断層帯に近接する位置であることが分かる。

写真1は相谷熊原遺跡から、対岸の山裾付近をみたものであるが、山腹付近で傾斜角が変化している。写真2は百済寺南川遺跡の位置を示したものであるが、遺跡を境に斜面の傾斜角が変化している。

図1の活断層帯との位置関係から考えて、少なくとも相谷熊原遺跡・百済寺南川遺跡・山女原遺跡は断層の活動によって生じた地滑り地形の緩斜面上に立地していると考えられる。ゴマ畑遺跡については同様の立地とはいえないかもしれないが、入組んだ谷の奥の平坦地ということを考えれば、近接する鎌掛断層や瀬の音断層の活動によって生じた地滑り地形による緩斜面地が存在するのかもしれない。

（3）鈴鹿山地の遺跡の位置と谷地形

先に触れたように、相谷熊原遺跡・百済寺南川遺跡・ゴマ畑遺跡・山女原遺跡は谷斜面にあり、二つの谷川の合流地点付近に立地する。谷という地形は水や魚などの確保に適した地であり、また移動に際しても適している。現在でも登山等には谷筋が使われることがあるのは、たとえ歩行距離が長くても、尾根に向かって直登するよりは安全で、かつ効率が良いからである。最終的には稜線を歩くにしても、どうしても谷筋を登らざるを得ない。一見すると、稜線の移動は障害物もなく効率よく移動できるように思われるが、悪天候時には命を脅かすほどの危険が伴う。突発的な突風や落雷から非難する場所がなく、簡単な装備では一時的なキャンプ地も確保し難いのである。

以上のことから考えると、谷斜面を選地して活動することは、食料確保と移動に適した場所であるからであろう。

（4）鈴鹿山地の遺跡の立地と位置と山越えルート

山中を移動するにあたっては、谷筋を利用することが多い。中世以降に利用される山越えルートは、平野部から山中に入ってから、谷筋をさかのぼって山地の鞍部（峠）に至り、山向こうへ抜けていく。図2は中世～近世にかけて利用されてきた、鈴鹿山地を通過する山越えルートと各遺跡の位置を示したものである。山越えルートと遺跡の位置関係は以下のとおりである。

相谷熊原遺跡と八風街道・千種街道 相谷熊原遺跡は、愛知川とその支流である渋川が合流する地点に位置する。愛知川沿いの谷筋は、八風街道として中世以降に盛んに利用されてきた山越えルートである。八風峠を経て三重県へ抜けることができる。渋川沿いの谷筋は、千種街道として、同じく中世に盛んに利用された山越えルートである。千種街道は、甲津畑から山中に入り、杉峠・根の平峠の二つの峠を経て、三重県菰野町千種へ抜ける。根の平峠を下ったところには、有溝砥石や石鏃が多数表採されている縄文時代草創期の西江野A遺跡があることが注目される。

百済寺南川遺跡と治田峠越え 百済寺南川遺跡の北方約100mのところには、浅いながらも谷川が流れており、二つの谷の合流地点の斜面地に遺跡は立地している。周辺には、歴史上に登場する街道などはないが、地元の人を知る山越えの道で、南川をさかのぼっていく道があるらしい。この道は、谷をさかのぼったところの大峠を経て、加領川の谷に降り、百済寺甲（大萩）、筒井峠を経て御池川の谷に入り、木地師発祥の地で知られる君ヶ畑へと通じるといふ。君ヶ畑からは御池川をのぼり、ノタノ坂・茨川（廃村）・治田峠を経て、三重県いなべ市の青川峡へ抜けることができる。治田峠の手前には茨川の集落（廃村）があり、茨川の人達は治田峠を越えて滋賀と三重を行き交っていた。**ゴマ畑遺跡と笹尾峠越え・馬越え** ゴマ畑遺跡は、かつて鎌掛の山中で亜炭採掘をしていたときに飯場だったところのようで、狭小な二つの谷が合流する箇所狭い平坦地である。ゴマ畑遺跡の西側には、八風街道から分岐して、笹尾峠を経て東海道へ至る御代参街道が通る。一方、日野町蔵王から山中を通り、「馬越え」と呼ばれる峠を経て、旧土山町青土へ抜ける山道もよく利用されたようである。修験者達もこの山道を利用した。

山女原遺跡と安楽越え 山女原集落は、猪谷川と丸太谷川の合流地点の緩斜面上にある。先に述べたように、東海道鈴鹿峠越えの間道として使われた山越えルートである、安楽越えの途中に位置する⁽¹⁾。

鈴鹿峠遺跡と鈴鹿峠 東海道の鈴鹿峠に位置する。鈴鹿山地の峠としては、標高は高くはないが、急激に高度を増す難所である。峠を三重県側へ下ったところには、古墳時代や縄文時代早期の遺跡がある⁽²⁾。

以上が各遺跡の立地と位置であるが、鈴鹿峠遺跡を除く

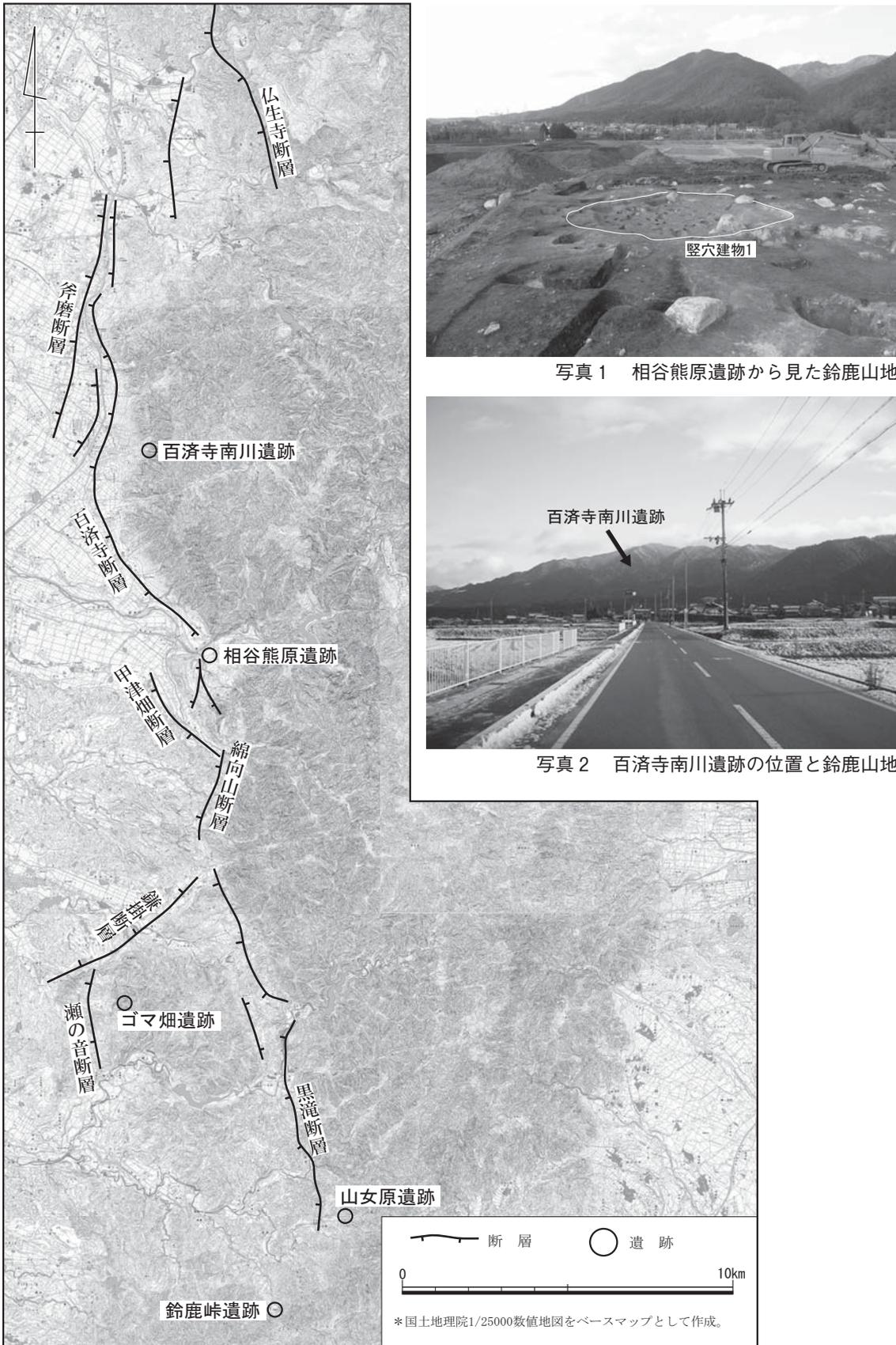


図1 鈴鹿西縁断層帯と遺跡の位置

四遺跡については、時代以外はほぼ共通するところがある。それは、いずれも山越えルート上の谷の合流点に立地することである。

4. 選地の原理

（1）緩斜面地の選地理由

鈴鹿峠遺跡を除く四遺跡は、断層帯付近に形成された緩斜面に立地する。相谷熊原遺跡と百済寺南川遺跡は発掘調査の結果、集落跡であることが分かっている。ゴマ畑遺跡・山女原遺跡の性格等は不明だが、何らかの活動痕跡であることは確かである。居住にせよ一時的な居留であったにせよ、平坦地や緩斜面地を選地するのが自然である。遺跡の立地は断層を意識したものではなく、断層によって生じた緩斜面を利用したのであろう。

（2）谷筋の選地理由

鈴鹿峠遺跡を除く四遺跡は谷の合流点付近に立地する。谷筋を遡ればやがて峠へ至る。谷筋が移動のための道と考えれば、谷に面する位置にある遺跡は移動と道に関する性格を有すると考えたい。鈴鹿峠遺跡は峠に位置しており、山越えそのものを示す遺跡である。よってこれらの五遺跡は何らかの役割を果たすため、ある活動のために、山越えルート上、特に谷の合流点と道の交差点と、その近辺の緩斜面地を選んでるように思える。

（3）山中の遺跡の選地の原理

谷筋または谷の合流点を選ぶこと、その近辺の緩斜面地を選ぶこと、これら二つの選地傾向は、山中において何らかの活動するときの選地の原理と考える。

では活動目的は何か。後の時代に山越えルートとなる谷筋に位置することから、多方面との交易や交流を目的とする活動と考えられるのではないだろうか。長く険しい山越えを補助するための、市や宿場的な中継地点の役割があったのではないだろうか。

谷筋に立地すること以外に目を向ければ、山資源の採集ということも考えられるだろう。本稿では鈴鹿山地の遺跡のみを採り上げたが、鈴鹿山地北側の伊吹山地や、琵琶湖西側の比良山地にも同様の遺跡が存在する⁽³⁾。いずれの遺跡も立地が鈴鹿山地の遺跡と似ており、遺物の出土のみが確認されていることが多く、詳細は不明である。

鈴鹿・伊吹・比良の山地は、鉄や銅などの鉱物資源が採れる。比良山地では古代には製鉄が行われていた。伊吹山地と鈴鹿山地では、戦国期より鉱山があった。国内において金属器が用いられるようになった時代の山間地の遺跡については、木材や鉱物資源採集を目的とした活動も、視野に入れておく必要があるのではないだろうか。

しかし、相谷熊原遺跡については、選地の原理は同じとしても、稲作をする訳でもなく、金属器も用いない縄文時

代であることから、それ以外の遺跡の活動目的とは異なる目的で、相谷の地を選んだはずである。そこには日々の生活と密接に関係するものがあつたはずである。

5. 相谷熊原遺跡の縄文時代草創期集団の選地原理

相谷熊原遺跡の縄文時代草創期の人々は、移動に適した谷筋と、活動や居住に適した地として、愛知川と渋川の合流点の緩斜面地を選んだ。

食料確保という視点で見れば、二つの谷の植物や動物の採集・狩猟行動ができるうえ、山間部と平野部の食料確保がし易い位置にあるのも、選地理由の一つであろう。谷筋を活動エリアとすることは、草創期初頭頃からみられる⁽⁴⁾ことがある。

一方、資源の確保という視点で見てみる。相谷熊原遺跡の縄文時代草創期の5棟の竪穴建物からは、石鏃などの剥片石器類、有溝砥石や石皿などの礫石器類が多数出土している。剥片石器に用いられている石材は、下呂石・サヌカイトも含まれるが、大半は堆積岩であるチャートである。チャートは遺跡周辺から採取可能な石材である。礫石器の石材としては、火成岩である花崗岩や、堆積岩である砂岩が多い。チャート・花崗岩・砂岩は、いずれも鈴鹿山地では採取可能な石材である。鈴鹿山地は単一な岩石から成る山地ではなく、火成岩と堆積岩から形成されている。綿向山麓にみられる変性岩地帯もある。石器を盛んに用いた縄文時代においては、食料確保・石材確保という点からしても、居住するには好適地であったといえよう。

一方、移動に関してはどうか。相谷熊原遺跡の草創期の竪穴建物から出土した石鏃の中には、伊勢湾沿岸などで採取できる下呂石製のものがあつた。また、下呂石の礫皮もみられ、石材を持ち込んで加工していたことが分かっている。削器にも少量ながらサヌカイト製のものがあつた。東海や近畿中部との行き交いがあつたことが想像できる。

そして、相谷熊原遺跡の山向こうには、三重県菰野町の西江野A遺跡（山崎2005）である（図2）。西江野A遺跡は、有溝砥石や石鏃が表採されている縄文時代草創期の遺跡であるが、その位置は千種街道の三重県側の入口であり、滋賀県側からは出口でもある。相谷熊原遺跡は、千種街道に通じる渋川にも面していることから、同時代の遺跡をつなぐ縄文時代草創期の山越えルートの存在を想定したい。西江野A遺跡と相谷熊原遺跡とは、時代以外の共通性が分からないため、想像の域は出ないが、後の時代の山越えルート・千種街道の前身的なルートが既に成立していた可能性を考えたい。

以上のことから、相谷熊原遺跡の草創期集団は、他の地への移動ルートの確保・食料および水の確保・食料確保のための道具の材料確保という点から、相谷の地を選んだと思われ、それ以外の百済寺南川遺跡・ゴマ畑遺跡・山女原遺跡の選地原理とは異なる選地の原理があつたと考える。

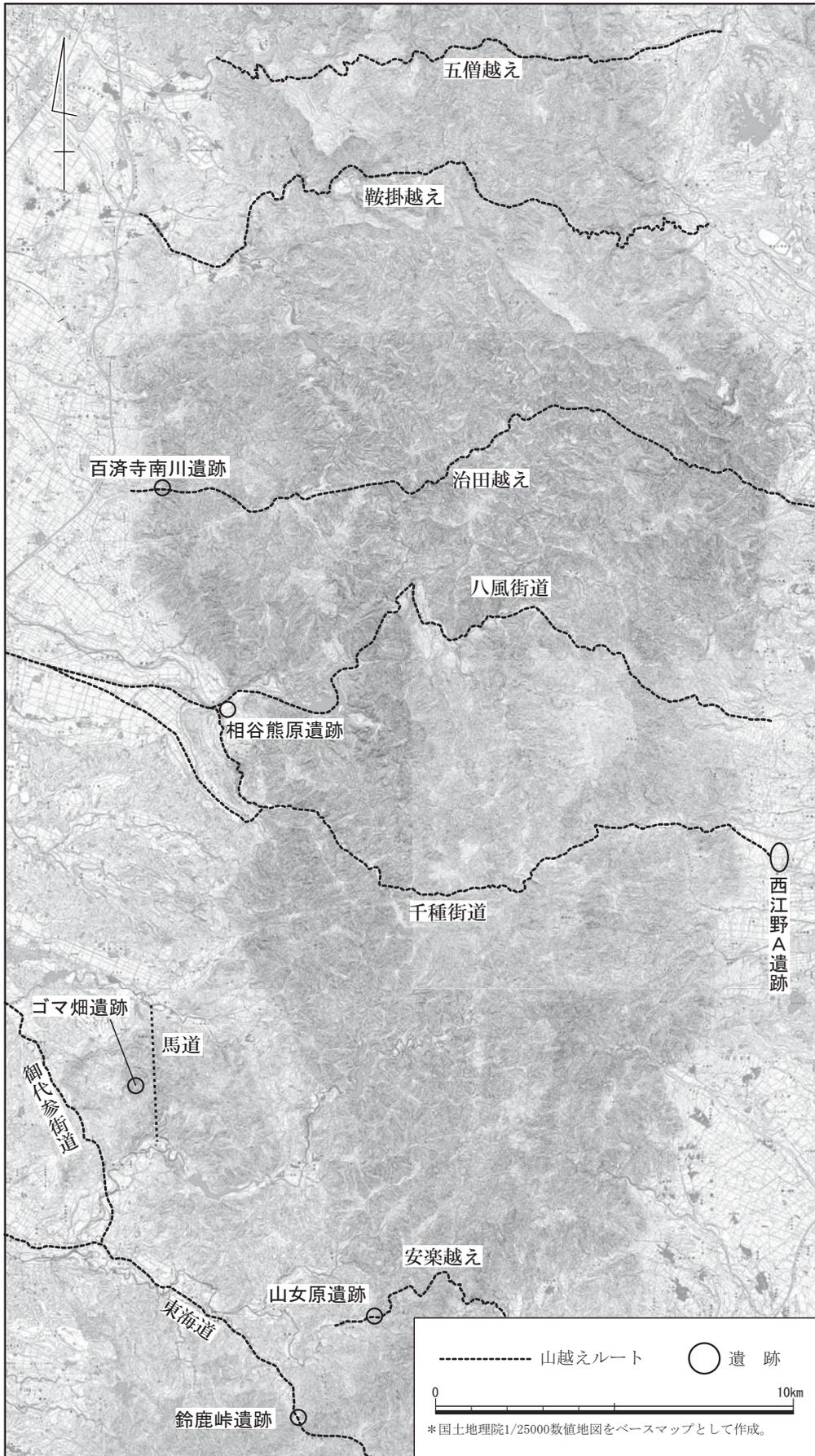


図2 鈴鹿山地の遺跡と山越えルート

相谷熊原遺跡では、縄文時代草創期のほかにも、縄文時代前期～晩期の遺構や遺物が出土している。特に晩期の遺構としては、土器棺墓が30基出土している。弥生時代中期の堅穴住居や鎌倉時代の遺構・遺物も出土しており、ほとんどの時代でこの地が利用されていたようである。山間地の活動において、相谷の地は好適な立地条件であったと考えられる。

6. おわりに

相谷熊原遺跡の縄文時代草創期の集落跡は、これまであまり注目されなかった地点での発見であった。しかし、類例が少なく、詳細が分からない時代なため、遺跡を理解する方法を模索しているのが現状である。これを打破するために、まず基本的な立地条件の分析を試みたのだが、調査例が少ないこと、時代に共通性があまりないこと、遺跡の詳細が不明なこと等々、危険な考察であることは否めないが、山間地における遺跡の想定位置や、遺跡の性格を考える上での一助となれば幸いである。

註

- (1) 山女原遺跡とは時期が異なるが、安楽越えの北側の谷からも、遺物のみが出土する場所がある。三重県側、石谷川上流部のガンサの谷と呼ばれる谷筋において、植林作業中に古墳時代中期頃の土器が出土している（筑紫・生駒1958）。ガンサの谷は険しく、登山用の地図でも難所とされている谷筋であるが、文献を見る限り須恵器採集地点は、二つの谷の合流点の緩斜面地であり、鈴鹿峠遺跡を除く四遺跡の立地条件と似ている。
- (2) 鈴鹿峠を三重県側へ下ったところの新所町には、古墳時代前期の新道岩陰遺跡がある（関町教育委員会2003）。新道岩陰遺跡は、鈴鹿川と加太川の合流点に立地する岩塊を用いた岩陰遺跡である。二つの谷筋の合流点は、鈴鹿越え東海道と加太越え奈良街道の交差点でもあり、立地条件は鈴鹿峠遺跡を除く四遺跡と似ている。
- (3) 伊吹山地における同様の立地の山中の遺跡としては、縄文時代早期の土器が出土した起こし又遺跡（旧伊吹町曲谷）がある（伊吹町教育委員会1993）。弥生時代や古墳時代の遺跡としては、寺山遺跡（旧木之本町川合）などがある（木ノ本町教育委員会1991）。比良山地については、弥生時代の道街道遺跡（旧志賀町栗原）・鎌黒遺跡（旧志賀町南比良）などがある（志賀町史編さん室編1981）。いずれも遺物の出土が確認されるのみで、詳細は不明である。
- (4) 藤山龍造氏による、関東における後期旧石器時代末頃の集団の活動痕跡の分析に基づく（藤山2009）。藤山氏は尖頭器石器類の単独出土遺跡に着目し、これを狩猟等の活動痕跡と考え、各段階での関東平野南西部の分布状況を分析した。分析に用いた段階は、隆起線土器群出現に先行する段階（Phase1）・隆起線土器群出現の段階（Phase2）。その結果、

Phase1では広い平坦地を活動の場とし、広い範囲を疎らに利用していたとされる。Phase2では活動エリアがPhase1とは異なり、広大な平坦面を対象とせず、丘陵部へ進出し、枝谷によって分断された地形を活動エリアとするようになる。

文献（著者名・刊行機関名50音順、刊行年順）

- 伊吹町教育委員会（1993）『起こし又遺跡発掘調査報告書』
 木ノ本町教育委員会（1991）『木ノ本町内遺跡分布調査報告書』
 甲賀市史編さん室編（2007）『甲賀市史 第一巻』
 小林健太郎（1998）『滋賀県の地形』ナカニシヤ出版
 志賀町史編さん室編（1981）『志賀町史 第四巻』
 滋賀県教育委員会編（2003）『平成13年度滋賀県遺跡地図』
 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2007）『百済寺遺跡』（南川通常砂防工事に伴う発掘調査報告書）
 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2009）『相谷熊原遺跡現地説明会資料』
 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会（2010）『相谷熊原遺跡現地説明会資料』
 滋賀県地学協会編（1977）『生きている化石湖』法律文化社
 瀬川欣一（2000）『ふるさと鎌掛の歴史第1巻』サンライズ印刷
 関町教育委員会（2003）『新道岩陰遺跡』
 筑紫申真・生駒 勝（1958）「鈴鹿山脈の古代遺跡－亀山市安坂町ガンサの谷における－」『地方史研究史 鈴鹿』三重県立亀山高等学校
 奈良県立橿原考古学研究所（1994）『一万年前を掘る』吉川弘文館
 藤山龍造（2009）『環境変化と縄文社会の幕開け』雄山閣
 細川修平（2006）「近江における弥生時代の集落研究の現状と課題」『人間文化』19、滋賀県立大学人間文化学部
 松室孝樹・重田 勉（2010A）「滋賀県出土の草創期土偶の新例－相谷熊原遺跡－」『考古学ジャーナル』608、ニューサイエンス社
 松室孝樹・重田 勉（2010B）「発生期土偶の新事例－滋賀県・相谷熊原遺跡の調査成果－」『古代文化』62－2、財団法人古代学協会
 松室孝樹・重田 勉（2010C）「相谷熊原遺跡と日本最古級の土偶の発見」『遺跡学研究』7、日本遺跡学会
 丸山竜平（1975）「堅田地域における国家成立過程－近江ルートの高地性集落の評価をめぐる－」『昭和50年度 滋賀県文化財調査年報』滋賀県教育委員会
 三重県埋蔵文化財センター（1994）『大鼻遺跡』
 宮下健二（1985）『縄文の道』『季刊考古学第12号』雄山閣
 山崎恒哉（2005）「西江野遺跡」『三重県史資料編考古1』三重県
- 挿図・写真典拠**
 図1・2 国土地理院1/25,000数値地図に拠り重田作成。
 写真1・2 重田撮影。
 （しげた つとむ：企画調査課 主任）

【編集後記】

本号は、当協会設立40周年を記念する特別号として、ボリュームアップをはかり、職員全員に投稿を呼び掛けたところ、総数17本を掲載することができた。

今回は、近年の注目すべき調査事例である東近江市相谷熊原遺跡に関連した3本の論考をまとめ、小特集とした。松室論文では、相谷熊原遺跡を縄文時代草創期と位置づける根拠となった「矢柄研磨器」について基礎的な検討を行っている。重田論文では、相谷熊原遺跡をはじめとする鈴鹿山中の諸遺跡について、選地原理の抽出を試みた。一方、出土遺物のなかでも特徴的な土偶について、瀬口論文では学説史をたどり、その評価の基礎固めをはかった。こうした検討を進めて、次年度以降、調査報告書刊行に向けて、整理調査を行っていききたい。

その他の論考は、時代・対象ともに実に多様なものとなった。縄文時代を対象としたものに、県内出土縄文土器の資料化と検討を行った小島論文、志那湖底遺跡出土岩田第4類土器群について検討を進めた小竹森論文がある。古墳時代では、辻川論文で県内出土埴輪の資料化と検討作業を行っている。古代を対象としたものには、これも近年の注目すべき調査事例－長浜市塩津港遺跡出土起請文木札に関し、基礎的な検討を行った濱論文や、柱穴構造から掘立柱建物の上部構造について意欲的に復元を試みた横田論文、県内に特徴的な飛雲文軒瓦の比較資料として三重県内の出土事例を報告した中西論文がある。中・近世を主な対象としたものとしては、湖南省夏見城遺跡出土毛抜きを位置づけることを目的として、毛抜きをはじめとした全国の化粧道具出土事例に関する検討作業をおこなった堀論文や、東近江市観音寺城遺跡の構造に関して再検討した伊庭論文、出土将棋駒を手掛かりに将棋史の一端に迫った三宅論文がある。さらに、阿刀論文では、滋賀県立安土城考古博物館での展示に携わったなかで見出された「忍者」研究について現状と課題がとりまとめられている。大沼論文では、琵琶湖を「文化遺産」として捉え、様々な側面からそれを構成する「資産群」の文化的価値について評価した結果、人類にとって「顕著な普遍的価値」を有する遺産であると結論付けている。具志堅論文では、当協会が重点的に推進する普及・活用・体験学習の一環として、本年度に実施した体験学習の内容と課題について報告し、中川論文では30年にわたる滋賀県における保存処理を振り返り、現状と課題を整理している。

近年、埋蔵文化財をはじめ文化財に対する需要は多様化し、求められる成果のレベルも高くなってきていることを痛感する。このようなニーズに的確に応じていくためには、職員一人一人の資質の向上が不可欠であることはいうまでもない。埋蔵文化財のみならず、地域の文化財の多様な側面に切り込み、その価値を見出すとともに、それを広く理解していただけるように伝える能力が今まで以上に必要となっている。本紀要も、そうした能力・経験・知識の獲得と蓄積、情報の発信の手段の一つとして位置付けている。

掲載論考の内容は未だ十分なものとはいえないことは承知しているが、読者の皆様には温かいご意見・ご批判を重ねてお願いする所である。

編集担当（T-T）

紀 要 第24号 —設立40周年記念号—

刊行年月日：平成23年（2011年）3月31日

編集・発行：財団法人滋賀県文化財保護協会

520-2122 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

(tel) 077-548-9780 (fax) 077-543-1525 (e-mail) mail@shiga-bunkazai.jp

印刷・製本：三星商事印刷株式会社

ANNUAL BULLETIN
of
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage

Vol.24 2011.3

私たちは文化財をとおして
ゆたかな滋賀づくりに貢献します。



財団法人滋賀県文化財保護協会
Shiga Prefectural Association for Cultural Heritage